

自然共生研究センターの紹介

(独)土木研究所自然共生研究センター 交流研究員 松間 充*



自然共生研究センター（以下、共生センター）は、河川環境の保全・復元に関する研究を実施する施設として平成10年11月、岐阜県羽島郡川島町に設立されました。研究施設や研究結果等については(独)土木研究所ホームページ (<http://www.pwri.go.jp/>) を参照していただき、今回は共生センターにおける地域交流や情報発信など研究以外の活動を紹介します。

【地域との連携について】

「総合的な学習の時間」における施設見学などの受け入れを積極的に行い、小中学生など若い世代に河川環境に興味を持ってもらう機会を提供しています。

その取り組みの一環として、毎年夏休みに近隣の小学生を対象とした「夏休み親子教室」を開催し、河川の環境について理解を深めてもらう試みを行っています。今年も共生センター内の実験河川において「水の流れを止め、普段見ることができない川の中の様子を見てみよう」というテーマで行いました。実際に魚を捕ったり、川底の様子を観察したり、子供達も楽しんで学ぶことができました。特に興味深かったのは、体験の前後で小学生達に自分の持っている川のイメージを絵に描いてもらったことです。川を見る前はテトラポットや人工的な川を描く子供が多く見られましたが（中には全く描けない子供もいた）、体験後は見つけた魚や水際の植生など、自然に近いイメージの川が多く見られるようになりました。子供達にとって、今回の体験でかなり川のイメージというものが変わったのではないかと考えられました。また、子供達を相手にしていると逆に子供の感覚を教えられることがあり、川づくりや今後の川のあり方を考える際には、そのような素朴な感覚も大事だと感じました。



写真-1 夏休み親子教室の様子

【情報発信について】

共生センターでは河川の自然環境の保全・復元に関する情報発信の一環として、視察・見学も積極的に受け入れています。共生センタースタッフの説明を必要とする場合は事前に申込みが必要で、上記ホームページの掲載事項を参照してください。施設への視察・見学者は開所以来約2万人を数え、現在も、

行政や学生、市民団体など様々な人が見学に訪れています。視察・見学コースは、研究棟でセンターの概要を15分程度のビデオで見て、その後実験河川を視察・見学するのが一般的です。

また、共生センターは、周辺に位置する自然発見館や木曾川水園といった国営公園、来年度開園予定の世界淡水魚園、ハイウェイオアシスなどと同じく、「河川環境楽園」の施設として位置づけられています。そのため、共生センターの視察・見学を目的とする人以外の、施設の利用者や、散歩中の地域住民などが共生センターを訪れることも少なくありません。そのような人には基本的に研究棟内の見学スペースを自由に見て頂いていますが、中でも「デジタルインタープリター」という機器は研究施設や研究内容を知ってもらうのに大変役立っています。共生センターでは河川環境に関する情報を如何に効率的に伝達するかという展示に関する研究も行っていますが、これはその成果の一つでもあります。センターの模式図上に研究施設や研究内容を示すICチップ付きのプラスチックカードを設置し、それを読み込み機に置くと、画面上で解説が始まる仕組みになっています。実際この機器を使ってみると意外と楽しく、訪れる人のほとんどがこの機器を使っているようです。カードの種類は多いですが切り替えも早いので、利用者はストレスを感じることなく使用できます。共生センターにお立ち寄りの際は、是非お試しください。



写真-2 デジタルインタープリター

子供達との体験や視察・見学者への説明を通して、レベルは異なりますが情報を伝えることの大切さ、難しさというものを感じました。河川は時間や場所によりその姿を変え、期待される役割も自然環境の他、地域交流の場や景観など人によりその思いは様々です。自然再生推進法が施行されNPOなど地域の人達との連携が必要不可欠になり、多くの人に正確な情報を伝え、共通の認識を持つことができるかが、ますます大切な問題となります。今後は、河川環境に関する研究はもちろんのこと、情報伝達や意識の共有化に関することにも目を向けていきたいと考えています。

※)リバーフロント整備センター 岐阜分室 研究員